

# たのしみ



春  
2007

## 大学構内のソメイヨシノ



3月～4月にかけて花を咲かせる落葉高木です。高さ5～15mくらいになります。

日本でオオシマザクラとエドヒガンを交配してソメイヨシノが作られました。学校や公園、桜並木におなじみの品種です。

さくらんぼに似た果実をたくさんつけます。最初は赤色ですが、どんどん黒く熟していきます。鳥などが食べているのでしょうか。黒くなるころには、ほとんど枝には残っていません。種子はほとんど発芽することは無く、挿し木で殖やされています。樹皮は特徴的です。灰色がかつた茶色で、横に模様が入ります。

◆本学ホームページ「奈良教育大学の植物図鑑」から  
[http://kaede.nara-edu.ac.jp/plants\\_of\\_NUE/homepage.htm](http://kaede.nara-edu.ac.jp/plants_of_NUE/homepage.htm)

## 4 【特別座談会】

## これからの教員養成

奈良教育大学 学長 柳澤 保徳

奈良教育大学 理事(広報・渉外担当) 甘利 治夫

## 8 奈良県教育委員会との連携協力が一層進む — 連携協力に関する協議会を開催 —

理事・副学長(教育担当) 重松 敬一

## 10 特色GPシンポジウム「特色GPの学生支援に果たす役割」で見たこと

教員養成GPプロジェクト・准教授 吉村 雅仁

## 11 平成18年度フレンドシップ事業

フレンドシップ事業担当・准教授 金原 正明

## 12 【ラボ・レター】

勉強の見返りではなく学習の嬉しさを

国語教育講座・准教授 橋本 昭典

キノコを通して森を見よう

理科教育講座・准教授 菊地 淳一

私の「これまで」と「これから」、

教育実践開発講座・教授 安藤 輝次

教師の支援を中心に

学術情報研究センター・准教授 伊藤 剛和

## 14 【ひと・あれ・これ】

毎日が完全燃焼

奈良市教育委員会事務局 学校教育課指導主事 中澤 静男

教師になって今思うこと

桜井市立朝倉小学校・教諭 峠 千尋

教師1年生

蒲郡市立大塚小学校・教諭 北川 飛鳥

福祉の仕事に就いて

養護老人ホーム 尼崎市立長安寮・寮母 辻合由紀子

## 16 【附属校園から】

幼稚園 奈良らしさを体験しよう! 「鹿せんべいってこんなふうに見えるんや」

附属幼稚園・教諭 竹内 範子

小学校 地域・家庭との結びつきを — 全校美術展をとおして —

附属小学校・教諭 山室 光生

中学校 佐保田の丘にて

附属中学校・副校長 植村 啓介

## 19 フォトギャラリー

## 20 【大学の仲間たち】

コチャバネセセリ

自然環境教育センター長 前田喜四雄

# これからの 教員養成



奈良教育大学 理事(広報・渉外担当)

理事

甘利 治夫

奈良新聞社代表取締役・主筆



奈良教育大学 学長

学長

柳澤 保徳

今回は、法人化以後における本学の教育面での取り組みについてお話しただきました。「力量の高い教員を養成する」という意志の下、様々な取り組みが一本の糸でつながっている様子が見える、大変貴重な対談になりました。

## ▼法人化後の取り組みの成果

### カリキュラム・フレームワーク

**甘利理事** 法人化後、奈良教育大学は非常に真面目に、また積極的に、大学運営に取り組んできたという印象を持っています。大学の規模が小さい、だから大学全体が見通せるということが最大限に生かされたようですね。

**柳澤学長** 真面目に丁寧な、教員養成、人材養成をやっているという姿勢があり、それは法人化以前から基本的には変わっていないと思います。特色GPで導入教育をやっていく、あるいは教員養成の特色あるプログラムを作っていくという、そのような取り組みに力を入れてきたかなと思っています。

**甘利理事** これまでいろいろな取り組みの中で、具体的にもう少し細かくお話を伺えればと思うんですが。

**柳澤学長** 実は、改めてこれまでの教員養成のあり方を考えてみるところから出発しました。それは、カリキュラム・フレームワークの議論であったり、あるいは教職大学院の設置計画であったりします。後者は、戦後初めて大学院における教員養成を本格的にやるというものです。大学における教員養成に加え、大学院における教員養成へのターニングポイントに差しかかりつつある時期だと思っています。

**甘利理事** 教員養成というと、これは日本全国どこも同じかもしれませんけども、「奈良教育大学の教員養成はこうなんだ」というそのあたりは、どうでしょうか。

**柳澤学長** まず、「目指すべき教師像についてのどのよう構成員全員で共有するか」が重要です。すべてがそこから始まります。小規模大学であるこ



とが、大きな力を発揮します。

私は、現職の校長先生や教頭先生、あるいは熱心に教育実践に取り組んでおられる先生方から様々な機会にお話を伺ってきました。特に、小学校の教師、新任教員に求められる資質とはなんなんだろうかと。

およそ四つにまとめられますが、「わかる授業ができること」「生徒指導ができること」「それを束ねる意味もあるんですけども」「子どもの心がつかめること」「それともう一つ「保護者とのコミュニ

ケーションがとれること」——この四つが新任教員として最低限持つていてほしい力だと、私は考えています。そして、それらを我々が「目指すべき教師像」としてかためていく。また、実際の四年間の教育でどのように作りあげていくのかということも大切です。そういう教師を育てるために、こういう形でここまで力をつけて欲しいということも少し具体的なところまでカリキュラムを組んでいこうという考え方に立って提案を始めました。

つまり、カリキュラム・フレームワークがそれなんです。これは日本語になかなかないものだと思います。私は「目標資質能力基準」と呼んでいて、四年間の教育の成果としてこれだけのものが学生諸君の力になっているというふうな考え方をしよう。CUFFET(カリキュラム・フレームワーク・フォー・エキスパート・ティーチャーズ)というのですが、新任教員レベルというよりも少し高いレベルを目指すものです。ビギナーズもいいんですけども、そこはもう少しついでやろうということ。目指すべき教師像を具体化する教育課程というものを学生諸君、さらには保護者のみなさまや学校関係者に対しても明確にしたいと思っています。

私たちは多分、先進的な教育課程を国立大学のトップグループに近いところで作りあげつつあるだろうという自負を持っているのです。

### ▼地域のフィールド 鍵的場面法

**甘利理事** 今、四つの例を挙げられましたが、「わかる授業」「生徒指導ができる」とかですね、具体的にはどういうことをされているわけですか。

**柳澤学長** 大学の教育は講義中心であったり、演習も大学の中だけで閉じている。いわゆる座学中心でした。それを、五年程前から学部改組をやっ

たりして、フィールドを活用した教育を始めました。教員養成ですと学校そのものの、教育の現場を指しますし、あるいは地域のフィールドを指したりします。その中で学生諸君が実践をする。それらの経験を踏まえ、大学の中で身につけた力を振り返っていくというところに一歩踏み込んだ進化があると感じます。そのことは、個々の授業でそれぞれ出来る上りつつあるんですけども、それを大学としてカリキュラムの中に位置づけたいと考えています。

また、各教育委員会のご支援をいただいて、奈良県、奈良市、大阪府、京都府山城教育局などの学校から、本学学生にもぜひ来て欲しいと要請を受けました。名称は様々なんで、ボランティアという言葉をしていきますけども、いわゆるインターンです。実際に教師の職場を体験する。その取り組みを課外活動の枠組の中で今、かなり取り入れているところ。そのあたりで、先程お尋ねになった私たちの考える「わかる授業」、あるいは「生徒指導力」を学生諸君には身につけてほしいと思っています。

**甘利理事** 今の時代、そのことがすごく大事だと思えますね。三つ目になりました「子どもの心がつかめること」というのはものすごく難しいことですが、やっぱりそういった経験を積む中で、学生さんが学んでいくのかなと思いますね。四つ目の「保護者とのコミュニケーションがとれること」というのはどういうことですか。

**柳澤学長** この保護者の方々との対応は、やはり非常に難しいですね。まず「わかる授業ができること」というものの総仕上げが教育実習だと思っ

置づけられているかという点、日本の制度はかならずしもそうはなっていないですね。教育実習の六週間実習で十分だとする制度に縛られているというか、それをベースにしていますので。それよりさらに深めていくことは、文字通り法人化以降、各大学の特色でできるようになったと思っています。

一カ月半の教育実習期間がありますが、やっぱり二カ月から三カ月間に違う形で移行させていくんだらうな、と私は思っています。しかし、現実にはそれをどうするかが非常にしんどい課題なんです。そういうプランはさておき、実際には「鍵的場面」というのがキーワードになっているんです。が、学生諸君あるいは大学院生に学校現場を体験してもらおう中で、「あっ、ここでつまずくのか」という気づきがあったり、あるいはある子が急に立ち上がってふらふらとした時、どう対応するのかということが大切なんです。これは地域の小学校で主に協力いただいてやっているんですが、そんな時、現職の先生がどう対応されているか、学生諸君が「これは鍵になる場面だな」と認識して記録をとるという作業の中で身につけてもらおうと思ってるんです。ある小学校の場合は、保護者の方々の懇談会の様子を間接的に聞かせてもらおうということをやっていたきました。これについては守秘義務が課せられますので、それがどうだったかどうだったかというのを全員で共有するというわけにはいかないんですが、参加した学生にとっては文字通りキー（鍵）となる作業をしていますので、このところが理解いただける連携校とともに積み上げていく形になるんだと思います。今までは、現場に出てから現職教員を三年やれば大体わかるという勘所でやってきたわけなんですけれど、最近の若い方々が採用されるケースの中、団塊世代の退職で技能が伝わらないという現象が実は教育現

場でも起こっているのですが、それを教育委員会の理解を得ながら私たち大学と地域の小中学校とが連携してカバーできる。それはむしろ、我々にとっても非常に価値のあるところだと思っています。

## ▼教職大学院 高度専門職業人教育 スタンダードとコーホート

**甘利理事** 少し話を変えますが、先程でました教職大学院ですが、今までの大学院との違いは。

**柳澤学長** 日本の大学は、戦後、高度専門職業人の教育をどのようにやるのかという基本的原理が十分確立されていなかったと理解して良いと思います。そして今それをどう考えるかという視点で見れば、教職大学院というのは私はそんなに無理な話ではないと思います。今回、改めて教職大学院を作るということは、本当に力量の高い教員を確実に養成することなんです。私たちのなかで教職大学院を準備している先生方が十名近くいるんですけども、彼らは「入ってくる院生との契約です」と言うんですね。「だから、院生が力をつけられなかったら契約違反なんです」と、そういうレベルなんです。これは先程申し上げた学士課程段階のフレームワークよりハイレベルの質の高い目標スタンダードを明確に決めています。ですので、教職大学院の特色とは、これは人によって若干違いますし、学長の若干の勘違いもあるかと思うんですが（笑）、キーワードを二つに絞れという、一つは「スタンダード」、もう一つは「コーホート」。「コーホート」とは「小集団」ですね。「小集団」なんです。ですから、「同一の経験を」という意味が入ります。ですから、大学院生二十名を想定していて、様々な経歴を持つ人、学部からすぐ来る人、現職の人、それから免許を持っていない人、そんな人たちが二十名程の一つのグループを形成するわけ



ですね。彼らは同期生でありコーホートなんです。その小集団に教員集団十数名ほどが共同で教育をしていく。集団による集団の指導実践という形で、体験を交流して理論化していく過程というのを院生と大学教員が共有していくという、そういう形です。ですので現行の大学院では成り立ちにくい。それをまず全国のモデルとしてやってみよう。そこをしっかりと強調していきたいと思っています。

**甘利理事** この教職大学院を出た学生さんたちの将来はいつたいどういうふうな。

**柳澤学長** 校長先生など学校経営のリーダーを養成するという考え方がありますが、私たちはスクールリーダーと言われている、授業なり学級経営のレベルで保護者の方々の対応も含め、それ

**Good Practice! の取り組み**

- ・2003年度「特色ある大学教育支援プログラム（特色GP）」に採択
- ・2005年度「大学・大学院における教員養成推進プログラム（教員養成GP）」に採択 鍵的場面における「対応力」を備えた教員の養成
- ・2005年度 新世代を先導する理数科教員養成プログラム
- ・2005年度 教育大学の特色・地域性を生かした芸術療法の総合的研究
- ・2006年度「資質の高い教員養成推進プログラム（教員養成GP）」に2年連続採択！ 高大融合による理数科高校教員の養成
- ・2006年度「大学教育の国際化推進プログラム（海外先進教育実践支援）」に採択・子どもスポーツ指導プログラムの国際化推進
- ・2006年度「国際大学交流セミナー」に採択
- ・2007年度「実験・観察融合型デジタル教材活用共同研究」（科学技術理解増進事業）に採択

に力量を発揮できる人材を養成することを考えています。そして、地域の小中学校で特に教科指導、生活指導、学級経営などにリーダーシップを発揮して学校間でもコーディネートできる人が必要で、そういった人たちを養成する。これは二十年度になつてみると、それぞれの教職大学院にかなり特色が出てくると思います。管理職養成にウエイトをおいた教職大学院であったり、初任者に一般的な力を付けるということにウエイトをおいた教職大学院であったり、本学のようにベースはやはり授業実践がコアだろうと考えたり。それを踏まえて学年全般に目配りができるようにする。それは新任教員にも期待できるだろうと、その辺までを視野に入れていっていると思います。

**甘利理事** そういふことになると、結果が出るのは二十年度、三十年後のことになるでしょうね。

**柳澤学長** いや、私自身は五年で成果を出さないとけないかと思っています（笑）。たしかに、二十年後とおっしゃる方もいるんですけど、それでは私は遅いと思っています。実は、認証評価といつて、いわゆる専門職大学院は五年に一回は必ず外部の評価を受けるんです。そのときに、修士生評価を

必ず入れます。ですから五年後にやるとすると、教職歴は長い方で三年ですから、修士生が組織的に立派な力を発揮しているかどうか、私は成果が出ていると思います。二年間のカリキュラムがかなりつめられてきていますけれども、その二年間の教育をくぐれば、かなりの力が付くんだろうと私は思っています。短期的な力は必ず付きます。では、長期的にどうか。そこが本当の勝負なんです。ノウハウだけ卓越した人を送ってきたけれども、そのあと伸びなかったと言ふんでは、期待にお応えできていないことになりまして、私自身は長期的な視野を持ちつつ短期的な力も付ける、そこが今回の教職大学院に期待されているのかなと思っています。長期的な効果を無視しているわけではないんです。

▼ **奈良教育大学をめざす**

**甘利理事** では、これは最後のテーマになります。が、今回受験生が多かったということ、なぜその大学を目指すかといったら、結局卒業してどうなっていくのかというのが大事なわけです。その辺のところをお話をちよつと。

**柳澤学長** 教員採用試験を含めて一般企業もそう

**地域との連携**

- 2004年3月17日 奈良県教育委員会と県立青翔高校における教育特区推進に関する覚書を締結
- 2005年7月29日 奈良市立3小学校との教育連携に関する協定を締結
- 2006年3月29日 学校法人奈良育英学園との連携協力に関する協定を締結
- 2006年6月12日 大和郡山市との連携協力に関する協定を締結
- 2006年6月28日 曾爾村との連携協力に関する協定を締結
- 2006年7月18日 奈良市教育委員会と先導理数事業に関する協定を締結
- 2007年1月18日 奈良県立平城高等学校との教育連携に関する協定を締結
- 2007年2月2日 奈良市立一条高等学校、奈良県立北大和・奈良北高等学校との融合理数事業に関する協定を締結

なんですけれども、景気の回復も伴い、最近採用がかなり多くなってきたと思います。私達は中期目標を法人で立てているわけですが、数値目標をあまり入れたくないという話があったものの、いくつか数値を入れているんです。で、教員就職率60%を掲げています。これは今から五年程前、就職率でいうと20%を切るとか切らないとかいう、全国的に教員採用の状況が非常に厳しかった中、やはり努力してでも就職率を上げていこうと考えました。昨年あたりから、採用が大幅に増加してきましたという傾向と相まって数値目標の60%をほぼ達成しつつあるという状況です。で、その意味で最近入学してくる学生諸君、あるいは入学を希望する学生諸君でいうと「教員になれる」、あるいは「なるつもり」という、そういう達成可能な目標として卒業後のことをイメージして入ってくるんだらうと思っています。その意味で私達は期待に応えたい。心えたいその手法が、先程申し上げた方がいい。カリキュラムとその内容ということにつながります。それで、もう一つは地域推薦ということ、将来必ず奈良県の教師をやってみたいという希望を早くから抱いている学生諸君を優先的にという大変なんですけれども、別の推薦枠で入学していただく、そういう形もとりました。これは地域に対する積極的な貢献の一つというふうに私は思っています。

**甘利理事** なるほど。そういった教育面での様々な取り組みが、かなりのスピードで、かつ着実に成果を上げてきていることがよくわかりました。小さな大学であることが、むしろ大きなパワーとなつて、法人化以後の奈良教育大学を進化させているんですね。教員養成教育のスタンダードモデルの構築を頼もしく見つめていきたいと思えます。ありがとうございました。

## 奈良県教育委員会との連携協力が二層進む ― 連携協力に関する協議会を開催 ―

理事・副学長（教育担当）

重松 敬一

本学は平成19年2月6日（火）に「奈良教育大学と奈良県教育委員会との連携協力に関する協議会」を学内において開催しました。この協議会は、教員の資質向上を図るとともに、広く教育に関する諸課題に対応するため、相互に連携協力して実践的研究及び活動を行い、その成果を生かして双方の教育研究の充実や発展に寄与することを目的として、平成15年度に設置されたもので、今回で第5回目の開催となりました。

当日は、教育委員会から矢和多教育長をはじめ、教育次長、関係課長等10名、大学から柳澤学長、副学長、学長補佐、関係委員会委員長、関係課長等15名が出席しました。協議会では、①教職大学院について、②教員研修について、③教員養成のための目標資質能力基準に基づくカリキュラムの構築及び評価システムについて、④高大連携について、の主に4つのテーマについて本年度の取り組み状況が紹介され、今後の連携方法等について意見交換が行われました。

教職大学院は、平成20年度から制度として発足するもので、現在、中央教育審議会で設置基準の策定が行われており、本学も開設準備を進めているところであること。その特色に関しては、院生が修了時までに目指すいくつかの教師像（目標資質能力）を教員集団と相談・決定の上、履修するプログラムや教育課程を決めるこ

と。実現可能な項目について修了者にどのような力をつけるのかを約束として提示し、これをカリキュラムの中で、本学独自の授業科目として配していること。授業の実施形態は、「学校実践Ⅰ～Ⅳ」などにおいて、連携協力校（現職教員の場合は勤務校）で教員と院生が共にチームで取り組み、組織で取り組む教育力を体験する予定であること。開講時期は、不定期の集中形式となること。入学対象学生としては、学部からの進学者、現職教員及び教員免許を持たない学生を考えていること。本学に設置する教職大学院は、理論と実践の架橋として位置づけ、教育課題に実践指導力のある教員として向き合える教師の養成を考えていることなどが紹介されました。

教員研修については、平成18年度に奈良県教育委員会との共催実施となった「スクールリーダーのための学校経営研修」（写真1）について報告があり、教員研修における本学の支援の実績が紹介されるとともに、県内の国公私立大学等と奈良県教育研究所が連携して実施している「教職員のための夏の公開講座」について、本学が開設した3講座の実施報告と受講者アンケートが紹介されました。

教員養成のための目標資質能力基準に基づくカリキュラムの構築及び評価システムについて、本学では、学部において養成する教員としての目標資質能力を「カリキュラム・フレーム



ワーク」として構築中であること。現在7つの大きな枠組みを設定しており、この枠組みを学生、教員が共有した上、教員養成の結果につなげられるよう細部を検討していること。この取り組みは、平成19年度からの文部科学省の概算要求にも採択されており、3つのシステム（ティー

# 大学の取り組み

チングII教員がいかに身につけるか、ラーニングII学生がいかに学ぶか、パブリックコミュニケーションII外部の評価はコンピュータシステム上での構築をめざしていること。外部の評価に関わっては、是非とも奈良県教育委員会の協力をいただきたいこと。他の県でも、例えば、



写真1 学校経営研修で矢和多教育長の講義

福島大学で教員スタンダードの作成が教育委員会との協力で行われているように、本学としても、より望ましい教員像、教員の資質能力目標について奈良県教育委員会の意見をいただいで、システムの完成をめざしたいことなどが紹介されました。



写真2 融合理数事業に関する協定書調印式



写真3 平城高校教育コース  
「絵本の読み聞かせ演習」  
本学えほんのひろばで

高大連携に関して、「高大融合による理数科高校教員の養成プロジェクト」は、教育委員会の協力を得て平成18年度教員養成GPにも採択された理数離れへの対応を高校教員の養成の観点から目指すプロジェクトで、平成17年度から実施している義務教育教員養成を対象とした先導理数プログラムを高校段階に適用し、連携校と有機的な協力関係を保ち、継続的に行うプロジェクトであること。具体的には、一条高校及び奈良北高校と協定を結び、教育プログラムと高校授業展開の結合、相互の学びの連携による学力向上等に取り組んでいることが紹介されました。(写真2)

また、教育委員会からは県立高校の教育コースについて説明があり、その目的は、高校生に対するキャリア教育の推進と今後の教員需要を視野に入れて、高校生段階から小学校教員への意欲と資質をもつ人材の育成を行うことであること。県内では、平城高等学校及び高田高等学校において実施しており、近隣小学校と連携した活動や大学との連携による活動に取り組んでいることなどが紹介されました。(写真3)

その他、①特別支援教育研究センター(仮称)について、②学生ボランティアについて、③学校アドバイザーについて、④幼児教育について、⑤連携事業・共同研究について、⑥教員採用に関する今後の見通しについて、など本学及び教育委員会から多岐にわたる連携の取り組み状況について報告があり、意見交換が行われました。

最後に、教員をめざす学生及び現職教員の資質向上について相互に連携協力を押し進めることを確認し合い、協議会は盛況のうちに終了しました。

## 特色G Pシンポジウム「特色G Pの学生支援に果たす役割」で見えたこと

教員養成G Pプロジェクト・准教授

吉村 雅仁

4年間に及ぶ奈良教育大学特色G Pの総括の一つとして、平成18年12月9日、本学大会議室においてシンポジウム「特色G Pの学生支援に果たす役割」を開催しました。本学の森本教授による奈良教育大学特色G Pの紹介に引き続き、同・上野ひろ美教授をコーディネーターとし、特色G P選定大学である北海道大学、関西大学、福井大学から参加いただいた安藤厚（北海道大学）教授、芝井敬司（関西大学）教授、松木健一（福井大学）教授から各大学における取り組みの紹介、さらに、キャリア・デザインの視点から教育実践を行っている小樽商科大学から招いた岡部善平助教による各取り組みに関するコメントという内容です。

シンポジウムの全体進行役をしながら各大学の取り組みを聴き、学生支援、教育改革について自身見えてきたことが二つあります。第一に、どの取り組みも学生が見通しと目的意識を持ち、大学の学びに取り組めるよう支援する試みであるこ



取り組みを紹介する森本教授

と。第二に、こうした「良い取り組み（G P）」を実施するためには、大学スタッフの組織作りと地域との連携が必須となることです。本学がこの二点から学ぶことは多いと思われま

### ■ 大学での学び方

第一の点に関して、北海道大学はそのコア・カリキュラムにおける目標を「高いコミュニケーション能力」「社会・文化の多様性の理解」「思考力・批判能力」「社会的責任と倫理」とし、「牧場の教室」や「船上の教室」など大学の資源を有効に利用した体験学習に加え、少人数討論、課題中心学習等の手法を通じて大学での学び方を学ばせることを試みています。関西大学は、ビジネス・インタラシップの蓄積を応用し、大規模な学校インタラシップを実践してきており、教職版のキャリア・デザインに留まらず、大学生全体の精神的、社会的な成熟を促す「実践型学外教育の大規模展開」をその柱の一つに据えています。このプログラムは、学生たちに対し、何のために大学に来て学ぶのか、ということ、どのように大学が彼らに伝えるのかという意味において極めて大きな役割を果たしているそうです。福井大学は、教師を高度な専門職と規定し、「地域との協働」と「実践的教員養成」とを柱とした実習プログラムを展開してきています。これは単に地域の協力を得ながら長い実習を行うというのではなく、学部教育と現職教育の両方を担う地域の教育センターとしての役割を大学が担うこと、すなわち地域と協働しながら学生

を育て学校を変えていくことを目指すものであるようです。とりわけ学生の教育に関して言うと、長い実習中の理論と実践との溝をケース・スタディで埋めるという工夫がなされています。

### ■ 組織作りと地域連携

第二は、小樽商科大学からの指摘通り、大学教育を変えるプログラムはどの大学においても大学スタッフの組織作りと地域との連携とが鍵であるという点ですが、いずれの大学においてもごく限られた人員が周りのスタッフを何らかの方法で巻き込み、なおかつ地域との連携を構築する苦労がよく理解できました。北海道大学においてはクラク博士からの理念の基に教員の理解を得てきたり、関西大学においては半強制的に学部の3分の1の教員一人ひとりに担当校を割り当て実際に向いてもらう措置をとったり、福井大学では地域の学校に極めて多くの学生を支援目的で派遣する形をとってきているそうです。

### ■ 今後の課題

以上二つの点を参考に、本学も少しでも多くの大学スタッフで、少しでも広い地域との協働体制を整えながら、導入科目群、カリキュラム・フレームワーク、教育実践演習、教員養成G P、教職大学院構想、そして地域学校支援等の一見独立した様々な取り組みを融合させ、学生や地域にその見通しが明確にわかる形にしておくことがこれからの課題になると思われま

# 大学の取り組み



ならまち探検隊



川上村で大歓声



シンポジウム

## フレンドシップ事業について

奈良教育大学では、子どもとのふれあい活動を通して教育実践力を育成するフレンドシップ事業を、「総合演習」「総合フィールド演習」として教員養成プログラムに取り入れています。フレンドシップ事業の目的は、学生自らが子どもを対象として実習、実験、野外活動を企画実施し、その体験活動を通じて、実践的指導力を身につけることにあります。学生がプレゼンテーションし、報告と討議を行うシンポジウムを毎年開催しています。

## ふれあい活動

平成18年度は、①夢化学21世紀——理科と工作をしよう——、②青少年のための科学の祭典2006奈良大会、③ならまち探検隊、④味覚をいかしたクッキング、⑤川上村で大歓声

を！、⑥書道を楽しもう、⑦古代探検「集まれ★古代っこ！」の7事業が行われました。目はそれぞれ、「常の生活、学校の授業では体験しにくい実験や工作を通じて科学の楽しさに触れてもらうとともに、科学に対する興味や関心を深めてもらう」、「理科や数学の好きな子どもの裾野を広げ、知的好奇心に溢れた子どもを育成するための環境を形成する」、「子どもがフィールドワーク体験を通して「ならまち」に親しみ、「ならまち」への関心を高めることや、学生が子どもとの交流を通して地域社会への理解と教育的実践力を高めていくこと」、「子どもたちの食への興味や関心を促すこと」、「山や川を身近に見つめることによって自然の大切さや自然観を認識する。地域の産業を知る。野外活動と生活を通し、分かち合いの精神からお互いを思いやる気持ちを持つ。自然のエネルギー（太陽光）

を電気エネルギーに変換するソーラーカーを製作する」、「書道に親しむ」、「古代探検を通して子どもたちに文化財の魅力や知識を伝えるとともに、私たち学生も指導者の立場に立ち、指導方法や事前指導等、身を持って体験する」であります。実践的かつ人間性を豊かにする要素を大きく有しています。対象人数は数十から数百まで、特定の学校に密着したものから地域的規模までさまざまです。

## シンポジウム

シンポジウムでは活動に参加した学生・教員はもとより、地域の学校教育関係者が参加し、報告と意見が出されました。主なものとして「企画・授業の組み立ての難しさ」「協働とそのコミュニケーションの大切さ」「子どもへの理解を深めるとともに子どもとのコミュニケーション能力や指導力などを实地に研鑽する機会ともなった」「指導者としての子どもたちへの接し方を学べた」「教育実習へ行く前の貴重な経験となった」「子どもたちとふれあうことの楽しさとイベントをやり終えた後の達成感を持った」「イベントを企画・準備・運営の仕方やメディア機器の活用法を学べた」などが述べられました。

協働の難しさ、子どもへの理解と接し方、指導力の大切さを感じることによって、実践力と指導力を学ぶ、フレンドシップ事業は初期段階の教育実践プログラムとして、重要な役割を果たすものであります。

フレンドシップ事業担当・准教授

金原 正明

# 平成18年度フレンドシップ事業

# 勉強の見返り ではなく 学習の嬉しさを

国語教育講座・准教授

橋本 昭典



神戸開帝廟にてゼミ生と

## ■言葉の来歴を知る

私は「漢文」と呼ばれる古代中国語で書かれた文献を日々読んでいます。漢文の最大の特徴は、三千年ほどの間ほとんど文体を変えることがなかったことです。ひとたび漢文読解力を身に付けたなら、『論語』から夏目漱石の漢詩まで読めてしまうのです。このことはまた、一言一句が数千年の歴史を担うという特質を生み出しました。私は今、十九世紀のある思想家の著作を翻訳していますが、時に一句を訳すのにまる一日かかることもあります。数千年の文章の中からその思想家が読んだに違いない幾冊もの書に当たって、ようやくその思想家がその一句を使用した意図を理解することができたのです。訳文にすればたった一句でも、それを理解するにはその何倍もある言葉の来歴を知らなければならぬのです。

## ■「学習」と「勉強」

この二つの言葉にも来歴があります。

「学習」は『論語』の「学んで何度も復習すると、そのたびに理解の深まりや能力の向上が感じられて嬉しい」に由来します。一方の「勉強」は、中国では「無理をする」という意味（日本でも「勉強しなせ」と言う時はこの意味）で使われ、日本語で言うような「学ぶこと」の意味はありません。

本来、学ぶことは、孔子も言うように、「上達」の感得が嬉しいということに根を置いたものでした。それが日本では「学ぶこと」とは無縁な「勉強（無理をする）」という言葉にその意味が加えられたのです。ちなみに「勉学」という言葉も中国語にはありません。どうやら日本では学ぶことは無理をすることと相性が良いようです。しかし、無理をするだけでは学ぶことに見返りを求めず、「勉強して何の役に立つの？」という問いが生まれてきます。そうではなく、私のゼミでは、上達することに嬉しさを感ずるその感性を養うことを何より大切にしています。

# キノコを通して 森を見よう

理科教育講座・准教授

菊地 淳一

## ■未知の学問

キノコというと、昔はカムイ伝などの忍者マンガのイメージが強く、暗くてじとつと湿った所にいつの間にか生えては消えていく、世の中の日陰者という感じがありました。最近ではドコモダケやホクトのキノコの歌など、少しイメージが明るくなったかな？

20年程前、野外のキノコの研究を始めた時、そこらへんのキノコの多くに名前がないことに驚きました。自然界には150万種以上のキノコやカビがいると推定されていますが、名前がついているのは1割以下です。本など読んで知識が増えてくると森のことも生物のことも分かったかの様な気になります。でも、理科（自然科学）というのとは分かっていないことの方がずーっと、ずーっと多い学問だと思えます。



おいしいタマゴタケ（春日山）

## ■共生

キノコは「木の子」ですが、実はキノコが無くては「親」にあたる木は正常に成育できません。多くのキノコは菌根菌といって木の根と共生して木の成長を助けています。秋の食卓を飾る（といっても我が家のことではないですが）マツタケも松の木と共生していて、松の成長を助けています。キノコがなければ成育できない樹木も多く、熱帯雨林の巨大な木の成長を制御している根系の調査や共生菌の研究なども行っています。



ラワンの大木の根の調査（インドネシア、スマトラ島）

## ■分からない楽しさ

ゼミの学生さんはキノコのことなど全く知らずに入ってきます。勉強するには英語の論文を読むしかなく、調査をすればキノコの多くは名前をつけるのも難しいという分野で、新しい知見を得るためにどのような努力が必要か、また自分が何かを理解するという事はどのような事を考えて欲しいと思います。卒業して教師になられた方もいますが、教科書に書いてある知識をただ教えるのではなく、その後ろにある膨大な知識、さらにその後ろにある未知の自然の大きさを理解して楽しんでくれたらいいな、と思っています。やっぱり、分からないことの方が楽しいと思いませんか？

# 私のこれまでとこれから

教育実践開発講座・教授  
安藤 輝次

## ■学校で生まれたポートフォリオ

ちょうど10年前、現職院生が2回生となり、勤務校に戻って、体験学習の教育的効果を実践的に検証しようという時、アメリカの実践をヒントにして取り組んだのが私のポートフォリオ研究の始まりです。

それ以来、学校実践で得た証拠を紡ぎながらポートフォリオの理論化に努め、総合的な学習や教科の発展的な学習における評価と学びの連動の考え方に帰着しました。このように私の研究は、学校の先生方が日ごろ悩んでいる問題に触発され、その問題解決に係わる過程から生まれたのです。

さて、ここで問題！



学校ケース・メソッドの教員研修

ポートフォリオは、次のどれにたとえられるでしょうか？  
①ビデオ ②アルバム ③灯台 ④ファイル

ポートフォリオは、①のように言語的学びだけでなくデジタルや作品などの学びも含め、②のように時系列に並べて評価し、③のように学ぶ方向を指し示すものです。詳しくはホームページをご覧ください。

（ホームページ）

<http://maistranara.edu.ac.jp/~andou/portfolio/del.htm>

## ■事例法からケース・メソッドへ

看護師さんを集めて職場の事例を討論するが、結論はオープンエンドで各自に任される。私が学生時代に恩師から紹介された事例法はこのようなもので、学校に導入するには「先生が明確な答えを求めるので、難しい」ということでした。

それから30年余り。学校は、決められた方法を機械的に適用するのでは今日の複雑な問題には対処できなくなり、事例法——英語で言えばケース・メソッドが教育界でも注目されるようになりました。写真は、小学校の先生方を対象にケース・メソッドを実施した時のものですが、この方法を使えば、教師一人ひとりが自立的に職務を遂行し、他人と繋がり、協働的に学ぶ力がつきます。これからは、学校の先生だけでなく教育実習終了後の学生さんにもケース・メソッドが必要な時代が来るように思います。

# 教師の支援を 中心に

学術情報研究センター・准教授  
伊藤 剛和

## ■ほしいものは作る

私の専門分野は、「教育工学」です。主に学校現場の先生方の悩みを伺い、一緒に解決していくために教育方法を考えたり、学習環境を整備したりすることを中心に活動してきました。

この分野に出会ったころは、コンピュータを授業の中に取り入れることが盛んでしたが、学校現場にある多くのコンピュータにはBASICというプログラミング言語しかないような時代でした。そんな環境の中、遠隔共同学習を実践して頂くため、子どもたちが考えたことを絵や文字で表現することができるソフトウェアを作製しました（「えほん」とか「かわらVAN」などという名前をつけて頂いていました）。酸性雨の共同観測の実践などで活用して頂きました。

また、汎用機という大学ぐらいにか無いような小型計算機の中に、今という電子メールや電子掲示板のような仕組みを作ったりもしていました。大学の授業の環境であったり、遠隔にいる現場の先生への遠隔教育のための場の提供でした。



校内ネットワークの利用説明会で

当時は、このように「欲しいものは、作る」が当たり前でした。今でも「自習を支援するための個別学習支援システムの開発」など、自分自身で開発しているものもありますが、最近ではデジタルカメラや携帯電話、PDAといった様々な情報メディアが高機能化し普及してきていますので、「既にあるものをうまく組み合わせる活用方法を考える」とか、そういうシステム類をうまく運用するための手法や人材養成なども手がけています。

## ■情報教育

もう一方、「情報教育」という領域も専門にしています。特に最近では、社会的にも注目されつつある情報モラルや情報安全教育といった分野にも挑戦しています。教科指導とは違う教育方法が求められる領域ですので、どうしていくと良いのか日々悩みながら活動しています。まだまだ若輩者ですが、教育大学の一員として学校現場と共に活動していきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひ致します。

# 毎日が 完全燃焼

奈良市教育委員会事務局  
学校教育課指導主事

中澤 静男

## 健康が第一

「失って初めて知る健康の有難さ」と、よく耳にします。私も「子どもは元氣なのが当たり前」と思い、二十年あまり小学校の教員をしていました。

昨年の四月の異動で保健係の指導主事となり、子どもの健康的な学校生活が、保護者はもちろん、保健所や学校医、養護教諭、学校栄養職員や保健主事と、実に多くの方々の努力の賜物であることに気付かされました。今まで気付かなかった私もうかつでしたが、それだけ素晴らしいチームプレーが行われていたということでした。

微力ですが、課長の指示のもと、奈良市の子どもの健康を守るために努力する日々を送っています。

## デイスカッション中心の授業へ

私の大学院での研究テーマは、小学校社会科における構成主義的問題解決学習への授業改革です。ごく簡単に言えば、子どもと教員が対話を通して思考し、保護者や地域を巻き込みながら、共に成長するということです。



係長と私（向かって右）

これは何も社会科に限ったものではありません。どの教科においても、応答的なコミュニケーションが思考力を高めます。今後、デイスカッションを中心とした学習活動を先生方と研究していきたいと考えています。

## 奈良発！ 世界遺産学習

奈良市には身近なところに世界遺産があります。この類まれな学習環境を生かさない手はありません。

世界遺産の価値を理解し保護するだけでなく、世界遺産を切り口にコミュニケーション能力や規範意識、異文化理解に取り組みつもりです。

夢を大きく持ち、失敗を恐れず前進したいと思います。

# れ ・ こ れ

# 教師になって 今思うこと

桜井市立朝倉小学校・教諭  
峠 千尋

## はじめの一步

私が小学校の教師になって、もうすぐ二年が過ぎようとしています。今思えば、「あっ」という間の二年間でしたが、毎日が新しく、まるでドラマのような日々の連続でした。

小規模校で単学級という事は学級運営において難しい事もありましたが、先生方の温かいご指導や、子どもたちの優しさや笑顔に支えられながら、大規模校では経験できない数多くの事を学ばせてもらうことができました。

## 認め合い、成長し合える なかまづくり

昨年度は二年生、今年度は五年生の担任として、子どもたちと共に様々なことを学びました。

特に今年度は五年生の子どもたちと一緒にいろんな事を考え、納得のいくまでじっくりと話し合う機会が多かったように思います。子どもたちの「なぜ?」という疑問に対して、すぐに答えを与えることは簡単です。しかし、その疑問に対して「なぜだろう?」と考えさせる事、そして子どもたち自身に子どもたちなりの答えを見つけてさせる事の

難しさや大切さを知る事ができました。また、話し合いの中でお互いの本音をぶつけ合わせる事により、自然とそれぞれの性格や考え方の違いに気付き、「互いを認め合う」事につながるのだと、クラスの子どもたちの成長した姿を見て実感しました。

## 夢はまだ終わらない

念願かなって今、教師として子どもたちと一緒に過ごしている毎日が、本当に幸せでかけがえないものだと感じています。大学で学んだ事、バイト先で体験した事、自分の今までの人生における全ての経験を毎日の授業に生かせるということは素晴らしい事だと思います。

しかし、忙しい毎日の中でふと、「私は思い描いていた教師にどれだけ近づいているのだろうか」と思う事があります。「これでいいのだろうか」と悩む事もあります。そんな時、元氣いっぱいの子どもたちの存在が「やっぱり先生になって良かった!」という想いを新たにしてくれます。

これからも自分の夢に近づけるように、毎日笑顔で頑張ります。



5年生の子どもたち

# 教師1年生

蒲都市立大塚小学校・教諭

北川 飛鳥

## 初めの一步

中学生の頃から憧れた教師になるため、進学した奈良教育大学。その大学を卒業してからの1年、毎日が戦いです。分からないことだらけの毎日。授業の準備や研修、事務処理的な仕事：正直言って日々追われるような毎日です。それでも子どもたちに会うと、なぜか元気が湧いてくるのが不思議です。大学時代なんて、今では遠い過去のような気さえします。採用試験に合格したとき、「これでやっと…」と思っ

## 子どもの力

学級に行くと、子どもの顔が日々変わっているのが楽しみです。うれしそうに家での出来事を報告してくれたら、また、ある時は算数の問題が思うように解けなくて悔しくて涙を流したり。「今日は給食を全部食べたよ」「わかった！ 算数って楽しいね」「先生、今日の放課後はドッジボールやる？」などなど、毎日いろいろな声を聞き、毎日いろいろな顔に出会い、毎日私をうれしい気持ちにしてくれます。時には、腹が立つこともあるし、毎日くたくた



初めての学級開きで

に疲れるけれど、それ以上にうれしい時間が多いです。子どもたちのピカピカの笑顔に会いに、私は学校へ行っているのかもしれない…と思うほど、子どもからエネルギーをもらっているように思います。その子どもからのエネルギーを受け、私が子どものパワーをもっともつと引き出し、成長を導いていくことで、子どもたちに還元したいと思います。学校のことや授業のこと、話し方や指導の仕方など、まだまだ未熟な点は多いですが、先輩の先生方から良い所を盗み、勉強を重ねて、私も子どもと共に成長していきたいです。

# あ ・ と ・ ひ

## 福祉の仕事に就いて

養護老人ホーム 尼崎市立長安寮・寮母  
辻合由紀子



子ども達と一緒にアスレチック

んな、子ども達の心の傷をケアしながら自立へと導き、親との関係も図っていくという仕事は大変難しいものです。

## 子ども達の姿

入所している子ども達は同情的に見られがちですが、どの子も強い生きる力を持っており、私達と何ら変わりはありません。ただ、十分な愛情を受けられずに育つたり、自立する時に援助を期待できる保護者がいなかったりするので。

そのため、私達よりも将来の選択肢が限られ、早くに自立しなければならぬケースが大半です。しかし、精神的に未熟な子ども達が社会に出ても、仕事が続かなかつたり、計画的に将来設計が出来なかつたり、色々な問題が起こります。そういった子ども達のフォローを出来る限りしていくことも仕事の一つです。

## 遣り甲斐のある仕事

福祉の仕事は成果がはっきりと見えないだけにしんどい仕事でもあります。ここまで遣れば終わりという区切りがないので、想いが強くなればなる程、遣りたいことも増えていきます。体力的にも精神的にもつらくなるため、子ども達が自立し退所を迎えると、燃え尽きたようになる人も少なくありません。それでも頑張れたのは、可能性を秘めた子ども達の笑顔と強く生きる力に励まされ、楽しい時間をたくさん共有できたからだと思えます。

幼稚園

# 奈良らしさを体験しよう！ 「鹿せんべいってこんなふうにできるんや」

附属幼稚園・教諭

竹内 範子

## 奈良を知ろう

奈良に住んでいる子どもたちに、奈良の良さや素晴らしさを体感させたい。文化遺産に恵まれたこの環境に触れる機会を多くもたせたい。と考えています。昨今の社会情勢や子どもたちの実態などから、園外に出ることが難しくなりつつある現状はありますが、そんな中でも、東大寺の大仏殿や二月堂まで遠足に出かけたり、近隣の鏡神社や白毫寺へ散歩に行ったりする活動を、職員が万全の体制を取りながら保育に



アツアツのせんべいどうぞ



園児の手作りの鹿せんべいをもって奈良公園へ



どんぐりひろい



お別れ遠足で浮見堂へ

取り入れています。

## 鹿せんべい工場へ見学

奈良に住む子どもたちにとつて鹿はとても身近な存在です。昨年の秋に、自分たちでどんぐりの鹿せんべいをつくり、奈良公園の鹿にあげに行くと、う経験をした年長児は、特に鹿に対して愛着を感じているようです。

そこで2月のある日、年長児の子どもたちは、鹿せんべいづくりの工場を見学に行くことにしました。「今日は奈良公園で売っている本物の鹿せんべいが

どんなところで、どんなふうにできあがるかを探検に行くよ」と告げると「わあーっ」という歓声があがります。幼稚園から大学を通り、西へ向かって子どもたちの足で40分ほど歩くと住宅街の中に鹿せんべいを作っている小さな工場がありました。

香ばしいにおいに心躍らせながら中に入ると、大きな機械の前でもくもくとせんべいを焼くおじさんがいました。子どもたちが寄って行くとおじさんができたアツアツのせんべいを手渡してくれます。「わあー、アツアツ

や」「えーっ！ 食べていいの」。いかにもおいしそうに見えるせんべいを手に、ちよつと躊躇しながらもあつちでも「パクッ」。こつちでも「パクッ」。米ぬかと小麦粉だけでできているので、ほとんど味はないのですが、できたての熱さがおいしく感じさせてくれるのでしょうか。初体験の味にみんなにっこり。「食べた鹿になった気分」と鹿のまねをする子どももいました。

機械から次々出来てくるせんべいに感嘆の声をあげたり、見たことのない機械のおもしろさに目を輝かせたりしました。鹿せんべいがこんな粉からできること、おじさんが独りで作っていること、機械でたくさんできることなどたくさんのお見せをしました。何よりも鹿せんべいの味を体験できたことが嬉しかったようです。

このような奈良ならではの楽しい活動をこれからも保育の中に取り入れて、奈良教育大学附属幼稚園だからこそ体験できる保育を模索していきたいと考えています。

# 地域・家庭との結びつきを

— 全校美術展をとおして —

附属小学校・教諭

山室 光生

## 全校の子どもたちの作品を 校内に展示して

『幸せ、おもちを食べるとき』(左上)・『一人で年末の大掃除』・『がんばって作ったストリートティ』・『ボールがくるぞ!少年野球の試合で』(左中)・『王手!おじいちゃんとの将棋』などなど。地域や家庭での暮らしに主題を得て5年生が描いた作品を見ると、「子どもたちはこんなことを感じながら暮らしているのかあ」「こんな考えを持つんだ」「大人なら見過ごしてしまいそうな出来事をととでも瑞々しく受けとめるなあ」と、子どもたちの地域・家庭での暮らしがうんと身近に感じられます。



『幸せ、おもちを食べるとき』(5年男子)



『ボールがくるぞ!少年野球の試合で』(5年女子)

全校美術展は、年に一度、全校児童の作品を附属小学校の多目的スペースに展示するもので、今年で37回を数えました。土・日も開場しますから、「ぜひぶんど無沙汰して」と父方母方双方のお爺ちゃんたちが本校児童を囲んで挨拶を交わされていたり、近所の老人介護施設から鑑賞に来てくださった方もいます。自分の絵を大勢の人たちに見てもらい、そして褒めてもらうことは、子どもたちにとって他に代えがたい喜びであり、励みとなります。

でも、◇子どもたちを社会的家庭的背景から捉え、休日・放課後の過ごし方と学力・体力の関係を考察すること、◇地域の課題を教材にとりこみ、地域の教育力との共同を図ることを実践的課題として取り組んできました。

美術という文化は、もとよりコミュニケーションをその営みに内在させ、しかも単なる伝達ではない、形に込めた意味を読みとった者同士の間人的つながりを生み出します。子どもに関わる惨事が後を絶たないとき、豊かな文化をとおして人と人とが人間らしく結びつき合う学校となることを強く願っています。



老人介護施設からも鑑賞に

中学校

# 佐保田の丘にて

附属中学校・副校長

植村啓介

## 附属中学校のこの頃

附属中学校では、本年の「入試説明会」

を10月にオープンスクールと銘打って開催し、12学級の授業参観を取り入れたり、生徒会役員が受付や案内を手伝うなど生徒の活動が見えるように内容を充実させました。これに関わり、校内では環境を整備し、廊下や教室の掲示板上に生徒の様々な作品を展示し、本校の教育に理解を深めていただくことにも重点をおきました。学校案内パンフレットづくりをはじめとする受け入れの準備等々では教職員がまとなり、ポスターおよび垂れ幕には大学の協力があつたことなど例年とは違う新しい試みが行われました。おかげさまで約500人の参加者があり、アンケートでは好意的なご意見が



クヌギの苗木を植える



多く見られましたし、受検生も増え努力の甲斐があつたとホッとしています。文化庁が支援する「子ども 夢・アート・アカデミー」という活動があります。これは子どもたちに専門の方からじかに話しを聞く機会をつくるために設けられたものです。本校も昨年からは講師を依頼し、ようやく今年度の1月19日に、日本芸術院会員で本校の卒業生でもある絹谷幸二先生に来校していただくことができました。美術の授業では、反対の色を混ぜながら「自分だけの色の作り方」を指導され、講演では「描いた絵を、少なくとも自分が好きになればそれはいい絵だ。」と語られるなどして、多くの生徒に感銘を与えてくださいました。生徒の部活動では、科学部が5月5日からオランダで開催されたFLL



2006FLL 全国大会優勝

(ファースト・レゴ・リーグ) 世界大会で世界3位に輝きました。11月17日から中国で行われたロボットコンテスト世界大会でも松田(2年)、栄長(3年)が2人1組で出場し、3位に入賞しています。科学部はこれらの活躍が認められ、2月28日に中学生としては初めて学長表彰を受けました。現在はFLL世界大会の前哨戦である近畿大会、全国大会で優勝を果たし、現在アメリカのアトランタでの大会に出場中で活躍が期待されています。裏山クラブの活動は、里山としての平城山の再生と、生徒の里山への「働きかけからの(自分や他者への)気付き」を

大切に育んでいくことを目的としています。里山再生の取り組みはそこでの「産物」が里山の暮らしやいのちを育んでいるという、「共生」の事実に基づき学習となります。地域との里山を巡る協同や交流の場づくりの取り組みの一つとしてシティ・サクセスファンドから「附中学の駅をつくる」という主題への研究助成を2年間にわたり受けることになりました。また、大学との共同研究を行っています。ピア・サポート活動(大学生による教育相談活動)と方向を一つにして、「里が育む教育力」、すなわち里山での活動や遊び(基地づくり、ツリーハウスづくり)、山の神祭といったスピリチュアルな体験を通して、コミュニケーション能力の育成を目指しています。

本校は今年度創立60周年を迎えるにあたり、数年前に60周年準備委員会が結成され、平成19年5月2日に記念式典や祝賀会を行うことになりました。9月にはPTA育桜会主催のバザーも予定されており、教育後援会や卒業生の八重桜会の援助のもと準備を進めています。現在は、記念事業として附属中のこの10年をまとめた『六十年のあゆみ』をつくることや、記録写真と生徒作品号「塔」の電子化を進める作業を行っています。このように現在、附属中学校では、教職員と本校に関係する方々で話し合い、創立60周年に向けて最後の仕上げに励んでいます。

サイエンス・パートナーシップ・プログラム「授業風景」



入学式



国際大学交流セミナー「開講式」



5回全学懇談会



NHK お宝中継「リハーサル風景」

# フォトギャラリー

奈良教育大学・2006年度を振り返って

卒業式



特別支援教育研究センター  
開所式



ユネスコ協同学校シンポジウム  
「ユネスコ本部ニールマイヤー  
による基調講演」



保育士養成フォーラム  
「教員養成大学における保育士養成の課題」



教員養成GPシンポジウム  
「鍵的場面での「対応力」を備えた教員の養成」



# 大学の 仲間たち



和名 コチャバナセセリ  
学名 *Thoressa varia*  
分類 セセリチョウ科  
翅開長 26～29mm

## 「コチャバナセセリ」

スマートなはずの胴体もやや太いなど、優雅なチョウのイメージからはかけ離れているために「ガ」のように思われているが、実は「チョウ」の仲間であるセセリチョウ科の仲間。これまで、イチモンジセセリとオオチャバナセセリの2種を紹介した。今回のチョウは、これら2種に翅の紋がよく似ているが、前者ら（羽を開いた長さが38ミリメートル）よりも明確に小型（同28ミリメートル）であることにより、簡単に識別が可能である。さらに後翅表面は黒褐色であるが、前2種と異なり、そこに白い紋がないか、あってもほとんど目立たない、また後翅裏面は黄褐色の地色であるが、黒褐色の翅脈が顕著である。

幼虫はササなどのタケ科といった身近にある植物を食べるので、本学内でも繁殖していると思われるが、私はこれまで確認していない。暖地では通常年2回発生しており、特に温暖な年には年3回発生するようであると言われているが、本学でもこの傾向があり、年3回発生するかも知れないと思われる年も知られる。越冬は幼虫のようであり、本学周辺では5月から8月にチョウが見られる。

（自然環境教育センター長 前田喜四雄）

**URL** <http://www.nara-edu.ac.jp/ECNE/index.htm>



奈良教育大学 広報誌

第24号 平成19年4月1日 編集／広報・情報公開委員会 発行／国立大学法人奈良教育大学  
〒630-8528 奈良市高畑町 TEL. 0742-27-9105 FAX. 0742-27-9141  
<http://www.nara-edu.ac.jp> [kouhou@nara-edu.ac.jp](mailto:kouhou@nara-edu.ac.jp)